



本格的な農業政策の改革を目指すべき時に来ている！

# どうなる日本のコメ！

毎日の食卓に欠かせないお米。昨年夏のスーパーの店頭から米袋が姿を消した「令和の米騒動」以来、スーパーでは価格が急騰。新米が出回る秋になると、たしかに米は店頭に戻ってきたが、肝心の価格は消費者の期待を大きく裏切った。今後も農家の高齢化や後継者不足で生産量が減り、さらに高騰するのか。いずれ主食のお米も輸入に頼るしかないのか？

## 後手に回った政府の備蓄米放出！

農林水産省がまとめた全国のスーパーで販売されているコメの平均価格は、2月9日までの1週間で5<sup>キ</sup>当たり3829円となり、1年前と比べて9割近く高騰した。品質の良い新潟県産コシヒカリなどは5000円近い価格となっている。

取り扱い数量は15万9000<sup>ト</sup>で前年同月比31%減となった。新米が出回った後も価格の高止まりが続く、業者間取引の値上がり、スーパーなどの店頭価格を押し上げる。JAグループなどの集荷業者が1月、卸売業者に販売した2024年産の1月の相対

取引価格は全銘柄平均60<sup>キ</sup>2万5927円で、過去最高を更新。前月比で+1262円、5%上昇した。福井県産の銘柄では、60<sup>キ</sup>あたり主力品種の「コシヒカリ」が2万4044円で、前の年の同じ時期と比べて59%、早場米の「ハナエチゼン」は2万2263円で、66%上昇。これは24年産の価格としては、最も高くなった。

コメ価格の高騰を受けて、農林水産省は凶作時などに限定してきた「政府備蓄米」の運用方針を転換、21万<sup>ト</sup>の放出を決めた。早ければ3月下旬にはスーパーなどに並び始めるが、消費者の期待通り価格は下がるのか。農水省は24年秋以降に新米

が本格的に出回れば、価格が落ち着くと見ていたが、高騰に歯止めがかからず、備蓄米放出を判断するも、後手に回ったとの批判は強い。

昨年夏、生産量を減らしていたところに、猛暑による23年産米の高温障害が追い打ちをかけて40万<sup>ト</sup>の供給不足に陥り、スーパーの店頭からコメが消えた。本来昨年10月から食べる24年産米を端境期の8、9月にかけて先食いしたため、同年産が供給される昨年10月から今年の9月までの供給量は端から40万<sup>ト</sup>減少していたのだ。

この状態が現在も続いている。24年7月ころから民間在庫は対前年同月比で40万<sup>ト</sup>程度少なくなっている。消えた